

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
個人研究費
2007年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	社会学部・教授	桜井厚 印
研究課題	戦時体験を語り継ぐ実践についてのライフストーリー研究	
研究期間	2007 年度	
研究経費	500,000 円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、戦時・戦後体験を受け継ぎ、語り継ごうとする人びとの活動に注目することによって、何が受け継がれ、何が受け継がれていないのかを記憶や語りの変容の視点からあきらかにしようとするものである。2007年度は、「戦場体験放映保存の会」や「満蒙開拓を語りつぐ会」などの聞き取り調査を継続しながら、おもに第二次世界大戦でわが国唯一の戦場となった沖縄で、沖縄戦を語り継ぐ人びとの活動を中心に調査をおこなった。具体的には、本土からの修学旅行生を対象に平和ガイドをしている人びと、各集落の悉皆調査を通じて戦時体験の記録を集積し、また地区内にある陸軍病院跡の壕の発掘と保存に精力的に取り組んできた南風原文化センターの活動などである。調査は継続中だが現段階であきらかになったことは、平和ガイドについては世代の違い、沖縄と本土の出身地の違いなどが沖縄戦を語り継ぐ活動において語りの違いを生み出していること、南風原文化センターでは沖縄戦の遺物や語りを受け取り側が現在のストーリーを作り出せるような提示の工夫がなされており、過去の事実というより現在の表象に意義を認めていることである。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[戦時体験] [ライフストーリー] [記憶の継承]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2007年度は、まず、前年度からの続けていた調査研究を継続し、「戦場体験放映保存の会」の活動の聞き取り調査、および「満蒙開拓を語りつぐ会」の活動の調査をおこなった。前者は主要な事務局スタッフにライフストーリー・インタビューをおこない、さらに「保存の会」会員の元兵士へのインタビューとそのビデオ収録場面に同席するなどして、活動の具体的な実践内容と会への参加動機などについて調査をおこなった。この会は、「無名、無償、無色」を原則に、日本各地に会員を募り、それぞれの個人支部を基点にネットワークづくりをしながら戦場体験者の声のアーカイブス化を目指している。担い手は、20代から50代までと年代、職業も多様なボランティアによって構成され、元兵士の戦場体験の語りを集積する目的だけで一致し、思想信条などの違いには頓着しないことで、今日でも各地に取材協力者を増やしつつある。また、「満蒙開拓を語りつぐ会」については、2007年10月20日のシンポジウムに参加するとともに、これまでまとめた『聞き書き集』などの資料収集とともに会員から若干の聞き取りをおこなった。

さて、本研究の2007年度の研究調査の重点は、わが国で唯一、戦場となった沖縄において、戦時体験を語り継いでいる実践的な活動とその担い手を対象とした。沖縄では、さまざまな活動があるが、そのなかでも二つを重点的な調査の対象とした。ひとつは、「平和ガイド」である。もうひとつは、市町村レベルではたいへん精力的に語り継ぐ活動をしていると思われる南風原町文化センターである。

平和ガイドとは、主に本土からの修学旅行生や希望する一般の旅行者を対象に、沖縄における沖縄戦の戦跡巡りや戦時体験を語り伝える役割を担って人たちのことである。その設立の経緯から、いくつかの団体が存在する。私たちがライフストーリー・インタビューの対象者をお願いした一人は、そのひとつ、「沖縄県観光ボランティアガイド友の会」所属の人である。幼少期に戦争を体験したAさん(男性)は首里に住んでいたが、米軍の沖縄侵攻にともなって家族とともに南部へ移動し、最後は摩文仁の丘のガマに避難しているときに敗戦を迎え、九死に一生を得た体験をもつ。そうした体験を軸に平和ガイドを務め、その英語力を活かして、最近では、沖縄侵攻をした元米兵に対してもガイドをおこなっている。終戦時にガマから救出されるとき、それ以前と以後での米軍に対するイメージが180度転換したときの逸話は、やはり体験者ならではの迫力がある。彼のガイドとしての語りは、そうした自らの体験を核に、独自に自らが調べた資料をもとに組み立てられていて、昨今の話題の「集団自決」などの判断も自らの体験と重ね合わせて語っている。

戦後生まれのBさん(女性)は40代後半で、これまでもいくつかの沖縄戦の体験を記録する調査にも参加し、現在もある地区の資料調査会の事務局長を務める。彼女のガイドの語りの基礎となっているのは本土による沖縄への差別であり、彼女の情熱的な説明のなかには常に沖縄のおかれた苦難の状況がある。そこには、単なる戦時の悲惨ではなく戦前から今日へ至る沖縄がおかれてきた状況から理解すべきとする彼女の考え方が反映されており、語りは戦争体験のことに止まらず、本土と沖縄の差異という大きな対立軸をもとに構成されている。

こうした視点とはあきらかに異なる若者による平和ガイドの活動がある。その一つ、沖縄国際大学の学生による平和ガイドのサークルは歴史も浅く、まだ2年余りの活動歴しかないが、本土出身学生も参加している。2004年に、沖縄国際大学に米軍ヘリコプターが墜落した出来事をきっかけに米軍基地の存在に関心をもった学生の呼びかけで作られたボランティア・サークルである。参加学生たちは、自らが身近な米軍基地の存在や沖縄の特異な問題に気づいていくプロセスが平和ガイド活動の基礎になっている。平和ガイドの語りは、彼らが現在の沖縄の抱える問題状況や疑問を背景に組み立てられており、なによりも修学旅行生とコミュニケーションをはかることに主眼をおいていることが特徴である。そこには、沖縄と本土という差異は最小限に止まっている。実際、サークルにおいても、本土出身者と沖縄出身者の違いは意識されていない。基地の存在がむしろ日常的に慣れてしまった沖縄出身者より、本土出身の方が大きな関心を示す傾向さえある。また、このサークルの成立や学生の考え方に影響したものとして、大学におけるカリキュラムに平和学が位置づけられていることも大きい。その主要な教育スタッフには、一貫して戦時体験の記録を集積し、数多くの戦時体験の研究成果を発表し、今日、論争になっている「集団自決」に関しても発言をおこなっている石原昌家氏(沖縄国際大学教授)がいる。石原教授にも何度かのインタビューを試み、その研究姿勢を含め大いに学ぶところがあった。彼のゼミ学生は、これまで一貫して戦時体験の記録を精力的におこない、いわば30年におよぶゼミ自体が語り継ぐことを実践してきたところがある。ともあれ、学生による平和ガイドの語り方は、今後の沖縄を語るときの新しい語り方を示唆するようにも思われる。

一般的に、語り継ぐ実践の代表格として資料館や博物館などの活動があげられる。本調査のもうひとつの対象は、沖縄でも精力的に戦時体験を記録し、戦争遺跡の保存と展示にも熱意を注いでいる南風原町の「南風原文化センター」

研究成果の概要 (つづき)

である。1989年の開館。沖縄戦では当時の人口の4割が戦死したため、文化センターでは無視できないテーマとなった。それ以前、83年から町の教育委員会の事業として沖縄戦の実態調査をおこなっており、それを引き継いで96年まで調査が続けられた。その調査法は悉皆調査であり、もともと浦添市で石原昌家教授がゼミでおこなった調査方法がはじめてである。全戸を調査用紙をもってまわる調査法だが、南風原町が特異なのは調査員が地元住民だったことである。各集落ごとに調査員を募り、一軒一軒、屋号の地図をもとに総ての家をまわり、その成果の一つに、首里に近い新川地区では戦死者が50%を超えていることなどがはじめてわかったことがあげられる。

文化センターは町史と文化財を担当していることでさまざまな見学者や相談者が来館し、同時にその人たちが情報提供者になったり、世代を超えて語り継がれる場所となっている。また、4年に1回開催される町民劇場では、平和創造劇があり、戦後世代はその劇によって戦争を追体験する機会があり、また子どもや若者はアートをとおして受け取るだけでなく伝える側にもなる機会となる。平和博物館のような単一 이슈を扱うのではなく、文化全体のなかで戦争を位置づけている点で、世代を超え、異なる文化との交流も活発におこなわれている。子どもたちは、定期的に本土の他の市町村の子どもたちとの平和学習の交流をおこなっていることなど、活発な交流機会が提供されている。

また、南風原町内には、ひめゆり学徒が看護補助要員として動員された沖縄陸軍病院南風原壕群が存在し、町は町の文化財に指定し、保存に力を入れるとともに町民を中心にガイドを養成し見学者の便宜をはかっている。ここにも、町行政が町民と一体となって戦争を語り継ごうとする意思と独自の方針を見て取ることができる。

こうした町行政の方針を具体的に担っているのが、南風原文化センターの職員である。彼らへのインタビューをとおしてあきらかになったことは、次の2点である。ひとつは、語り継ぐ実践で重視しているのは、主に上記にも述べたさまざまな立場の人の交流を促進し、体験者のみならず、語り継がれる側が語り継ぐ側にも転換できるような構図である。たとえば、子どもたちは父母や祖父母をとおして戦争体験を学ぶと同時に、本土の子どもたちとの交流をとおして語り伝える側にも立つ、そうした交流を積極的に推進していることである。それは実態調査において地元住民に調査員の役割を担ってもらっただけでなく、調査員として高校生などを積極的に活用した点にも見られる。もうひとつは、事実を伝えることよりも、現在の時点でそれぞれがどのようなストーリーを作り上げて当時の歴史解釈をしているかを積極的に評価していることである。たとえば、展示物は、特別なストーリーを仕立てて陳列されるのではなく、そのままに、ある意味では無造作にケースのなかにおかれている。一見わかりにくい展示の仕方は、見学者がそれぞれの観点から見てほしいという積極的な展示の意味がこめられている。戦争を表現したアートなどを利用したり、体験を聞いて子どもたちにもアート表現を指導したりのも、そうした活動の一つである。語り部の高齢化と不在の状況をにらんでの戦略とも解されるが、もはや語り部の紋切り型の語り口ではなく、いまの人たちの感性を研ぐ試みとしても興味を引く。

2点目の考え方は、「ひめゆり記念館」の学芸員へのインタビューをとおしてあきらかになった姿勢と対照的なとらえ方である。多くの資料館や博物館にも通じるが、ひめゆり記念館は、きわめて明確なストーリー性をもった展示が試みられており、当時の体験者の語りも語り部をとおして聞くことができる。しかし、いまや語り部の高齢化は、いかに語りを若い学芸員が受け継ぐか、どのようにその臨場感を受け継ぐことができるかが問題となってきている。南風原文化センターになれば、むしろ新しい語り方が生み出されてしかるべき、ということにもなるだろう。戦後、60年余りを経て、体験者が少なくなった今日、興味深い状況変化が起こっているというべきだろう。

以上、助成は2007年度の1年だが、本研究はまだ緒についたばかりといってよい。今後も継続し、さらにまとまった成果を出すように努めたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

その他

- ・ライフストーリー研究会

日時：2007年9月11日(火) 17:15-21:15

場所：立教大学12号館 第3会議室

口頭発表として、本研究協力者の齋藤雅哉(立教大学大学院)「<沖縄戦>を語り継ぐ-3人の語りを事例として」および八木良弘(慶應義塾大学大学院)「「無色」な人々による語り継ぎ運動-「戦場体験放映保存の会」を事例として-」の発表がおこなわれ、それぞれに桜井がコメントを付した。

今後の研究発表の予定

- ・ 『経験語り継ぐ(仮題)』(せりか書房、2008年7月出版予定)を桜井ほか(編)で出版を予定している。
- ・ 日本社会学会にて、おもに沖縄における語り継ぐ実践について自由報告を予定している。